



P.144
日台関係

P.150
沖縄から考える

P.156
コラム：台湾から見た日本

P.158
日本統治時代

戦後の日台関係

— 案内人 —
黄 偉 修



黄 偉 修 こう・いしゅう
東京大学東洋文化研究所特任研究員

東京大学東洋文化研究所助教を経て現職。専門分野は中台関係をめぐる国際関係。第6回日本台湾学会賞（政治経済分野）、第17回中曾根康弘賞奨励賞受賞。好きな歴史人物は大久保利通。時代小説と大河ドラマで西郷隆盛を詠める悪役とされているため悪いイメージが強いが、大久保利通が推進した政策は近現代の日本の土台を築いただけではなく、日本と台湾の関係をはじめ、近現代の東アジア国際関係に重要な影響を与えてきた。維新の三傑の中では、いままで西郷隆盛を主役としたドラマ、あるいは西郷と大久保の関係を中心としたドラマが制作されているが、某は大久保利通を主役とするドラマの制作を望んでいる。

戦後の日台関係は単なる日本と台湾の関係ではなく、大まかに言えば戦前から継続する日本と中華民国の関係（日華関係）、および日本と台湾の関係（日台関係）の二重関係であるとされる。さらにこの二重関係は、日本と植民地時代の台湾、戦前から1949年にかけての中華民国、1949年以後の蒋介石・蔣経国親子による中国国民党一党独裁政権の中華民国、民主化した台湾、2011年以後の台湾と細分化することができる。それに加え、日本と中華人民共和国（中国）の関係、台湾海峡兩岸関係（中台関係）、中台関係の平和的解決を直接担保する米国と日米安保条約の極東条項を通じて間接的に関与する日本との関係も混在し、重層的に発展してきたものであると言える。そして、この発展のプロセスは戦後から日中国交樹立にかけての時期、日中国交樹立から台湾民主化にかけての時期、1990年代から現在までの3つの時期に大別することができる。

戦後、日本は台湾での植民地統治を終結させ、蒋介石が率いる中華民国政府（1949年に中国共産党との内戦〈国共内戦〉で敗北し台湾へ撤退していた）との間で、1952年に日華平和条約を締結した。それにより中華民国を「中国を代表する政権」として国交を回復し、経済関係を発展させてきた。その一方で、日本は戦後経済の再建に中国大陆との経済関係が必要だと考え、対米協調を推進する吉田茂政権や反共政策を掲げる岸信介政権であっても、政経分離の形で中華人民共和国との関係を推進しようとした。蒋介石政権も日本の方針を受け入れざるをえなかった。また、日本は旧植民地の臣民であった台湾人をめぐる軍人恩給制度、台湾籍元日本兵用慰金問題、慰安婦問題、未払い給与や軍事貯金返還問題（確定債務問題）などの植民地統治の終結で旧宗主国として対応しなくてはならないのに、1990年代までに対応していなかった。また、日本国内における台湾独立運動に対して、蒋介石政権から厳しい取り締りを行なうよう求められた日本政府は、国内法にもとづ

いて最大限の取り締りを行なったのである。

1960年代後半になると、米中接近、国連中国代表権問題（中華人民共和国の中国代表権を認め、中華民国を追放する）など国際政治の変化が顕著になった。日本も中華人民共和国との関係を徐々に見直し、1972年に中国を代表する政権として同国を承認、中台関係の平和的解決を前提とする日中国交樹立を果たし、中華民国との国交を断絶した（日台断交）。中華民国は1970年代において国連から追放され、安全保障面で依存してきた日米との国交が断絶、米国との相互防衛条約も無効化したため、国際社会における公式の安全保障の枠組みから排除されることになった。

それと同時に、米国議会は台湾の安全保障への関与を大統領に義務づける「台湾関係法」を制定した。台湾をめぐる安全保障の構造は、3つの米中共同コミュニケ（1972年の「上海コミュニケ」、1978年の「国交正常化コミュニケ」、1982年の「武器輸出問題に関する共通コミュニケ」）、および「台湾関係法」の組み合わせという枠組みへ転換していったのである。日本も台湾の安全保障に間接的にかわりながら、日台断交により台湾との公式な外交チャンネルを失ったものの、経済や文化などで実務的な関係を維持・推進してきた。その結果、それまで蒋介石や国民党が推進してきた「反共」というイデオロギー的なチャンネルではなく、交流協会（現・日本台湾交流協会）、亜東関係協会（現・台湾日本関係協会）といった政府支援による組織、さらに日華関係議員懇談会（日華懇）などの準公式・非公式チャンネルが立ち上げられ、制度化されてきたのである。このような、日米を含む台湾と中国の関係を包括的に規定した枠組みは1972年体制（72年体制）と呼ばれている。日台は経済や文化などの実務分野での非公式な関係であったが、1972年から1980年代における日米中台の比較的安定した関係の下で、準公式・非公式チャンネルを通じて経済関係を徐々に深化させてきた。同時に、日中も日本の政府

開発援助（ODA）により、中台も中国の改革開放によって、この時期に経済関係を深化させてきたのである。

1980年代後半になると、台湾の民主化が国際政治に変化をもたらすようになる。中国の提案する「一国二制度」に対抗するため蔣経国が始めた民主化は、総統に就任した李登輝によってさらに推進された。李登輝は共産中国に飲み込まれないように、外交関係のある国との関係を維持し、外交関係のない重要な国との関係強化を図り、そして国連などの国際組織への復帰を積極的に図るという実用主義外交（務実外交）を展開した。日本植民地時代に生まれた李登輝は自らの人脈を活用し、知的交流により日本の政官財学界との関係強化にも尽力した。日台の知的交流は2000年代からさらに活発化し、経済や文化だけではなく、政治や安全保障も含めたセカンドトラックの交流が行なわれるようになった。2011年3月11日の東日本大震災に対する台湾の支援は、日台の実務関係を越えた「感情」というレベルでの交流をうながしたと言える。

中台の安全保障に関しては、中国は李登輝の対中政策を中心とする対外政策に反発し、台湾初の総統直接選挙に合わせ、1995、96年に第3次台湾海峡危機を引き起こした。これに対し、米国は2隻の空母機動部隊を台湾周辺へ派遣し、危機を鎮静化させた。一方、日本は1994年の朝鮮半島危機により安全保障の法整備を検討しはじめていたが、第3次台湾海峡危機と1996年の日米安保再定義を契機として法整備を進め、2015年には「平和安全法制」を成立させるまでにいった。間接的とはいえ、日本は台湾の安全保障に関与した日米同盟における役割が増大してきたと言える。

以上見てきたように、戦後から日中国交樹立にかけての段階では、日台関係はいわゆる日華関係が中心となっていたが、徐々に日本と中華人民共和国の関係に圧倒されるようになった。日中国交樹立から台湾民主化までの段階では、

日台関係は経済や文化などの分野に限定されるものの、安定した国際環境の下で実務関係とチャンネルの制度化を進めてきた。台湾の民主化以降は、台湾の安全保障に対する日本の間接的な関与と日台の非公式な関係は維持される一方で、実務分野の交流だけでなく安全保障分野を含めた交流へと拡大してきている。台湾の安全保障における日本の役割も国際政治の変化によってさらに重要になりつつある。

近年、中国の習近平政権は積極的に、自身の国家統一の主張を台湾に認めさせようと、政治・軍事をはじめあらゆる分野から圧力をかけ続けている。日本も尖閣諸島問題をめぐり中国から政治的・軍事的圧力を受けている。最近では新型コロナウイルス感染症のパンデミックが日台の中国に対する不信感をさらに高めている。朝鮮戦争の時期に比べ、米国の中国に対する抑止力は相対的に弱まっており、日本と台湾は朝鮮戦争以来、安全保障をめぐってもっとも危険な国際環境に直面していると言える。この状況に対応するため、日台関係はこれから新たな段階に進んでいくのではないかと考えられる。

『日台関係史 1945-2020 増補版』

川島 真、清水 麗、松田康博、楊 永明

東京大学出版会 2020年 ¥3,080
ISBN : 9784130322300



本書は、日本における戦後から現在、さらに直近の日台関係を論じた唯一の通史である。

序章では、それぞれ戦前以来継続する日本と中華民国の関係という日華関係、戦前から継続する日本と台湾の関係という日台関係の二重関係をどのように分析するかについて問題提起がなされている。第1章、第2章では、戦後日華・日台の二重関係の形成と発展について分析され、徐々に影響を及ぼしはじめた日中関係と「二つの中国問題」にも触れられている。第3章、第4章では、前章を受けて、これらの問題がいかに日華・日台関係をいびつなものにしたか、またいわゆる1972年体制の形成についても論じられている。第5章、第6章では、日華断交後の日台の実務関係がどのように深化してきたか、台湾の民主化に伴い実質的な政治関係がどのように実務関係を土台に発展してきたかが分析されている。第7章、第8章では、日本と台湾の安全保障環境の変化が及ぼした影響について述べられ、第9章では、2008～16年の馬英九政権期における中台関係と、その一方で東日本大震災への支援をはじめとす

る日台関係の進展について述べられている。そして第10章では、2016年以降の蔡英文政権第1期における日台関係について、分野ごとの進捗状況と将来への影響が示されている。

本書を読むことで、日台関係が単なる日本と台湾の関係ではなく、多くの複雑な環境と経緯に接していることが理解できる。日本の学界では、これまで日台関係を日中関係の裏面史として、中国外交史と日中関係史の一部とみなす傾向があった。本書の初版と増補版は、そのような状況において、日台関係の研究が市民権をえることに貢献したと言える。なお、本書の中国語版も2021年に台湾で出版されている。

1949年、台湾海峡を挟み中華民国（台湾）と中華人民共和国（中国大陆）の間で、中国を代表する「正統性」を争う対立構造が形成されたが、中華民国政府は1970年代にこの争いで敗北した。それとともにいわゆる1972年体制という「現状」が形成され、今日まで継続している。

中台関係の「現状」あるいは「現状維持」は、著者が指摘するように、単に立場によって解釈が異なるだけではなく、時期によってその内実が異なるものであり、それゆえ解釈は変化し続けるものである。著者によれば、1970年代初期には、中華民国が主張した「一つの中国」、および自身がその正統政府であるという主張が決定的に力を失った一方、中華民国という枠組みを捨て去ることはせず、各国との外交関係なき実質的な関係を構築していく過程で、「台湾としての」行動準則を形成し始めたように見えるとしている。この問題意識にもとづき、著者は台湾側の動向を軸にして、日本との関係に注目し、史料とインタビューを通じて台湾外交を分析する。すなわち、台湾撤退後の中華民国政府が直面した外交環境、日華断交、日台の実務関係の構築などを事例

『台湾外交の形成』 日華断交と中華民国からの転換

清水 麗

名古屋大学出版会 2019年 ¥5,940
ISBN : 9784815809355



として、「中華民国外交」がどのように「台湾外交」へと変容し、李登輝時代の外交まで積み上げられたかというプロセスを示すのである。

本書は、台湾の外交文書がまだ十分公開されていなかった1990年代において、著者が関係者へのインタビューと史料収集を行ない、2002年に公開された博士論文が基礎となっており、それに新しい史料を加えて加筆修正したものである。台湾の視点から真正面に日中台関係を分析した貴重な研究成果であるだけでなく、戦後台湾（中華民国）の政治外交史および戦後日台関係史研究の第一人者である著者が、台湾における外交史料の公開プロセスとともに歩んできた足跡とも言える。

『戦後日華経済外交史 1950-1978』

許 玠

東京大学出版会 2019年 ¥7,920
ISBN : 9784130362757



1972年の日華断交から現在にいたり、日本と台湾は外交関係が断たれたものの、経済や文化などの実務関係は維持されてきた。台湾の民主化以後、日台の実務関係はさらに深化し、その関係をもとに実質的な政治関係も前進した。研究の中には、日華断交後の実務関係を処理するため、チャネルや担当者がどのように再構築されていったかについて論じられてきた。また、中台関係は、冷戦時代から今日にいたるまで東アジアにおける重要な安全保障問題として取り上げられている。そのため、日米安保条約の極東条項により間接的に台湾の安全保障に関与する日本と台湾の関係は、政治、安全保障、歴史の視点から分析されることが多い。

著者は、断交後の日台実務関係と1950年代から発展してきた関係との間に関連性を見だし、その継続性に注目している。本書は最新の外交文書だけではなく、経済関連の資料も用い、これまで政治外交史の研究であまり取り上げられてこなかった日台の経済協力を中心に、1950年代から1970年代にかけての日本と中華民国の間における、貿易・資本や経済協力などの関係が分析されている。

日本と台湾の実務関係が深化してきたにもかかわらず、これまで経済の視点での実証的な分析が乏しかったため、本書は、日台の実務関係の連続と断絶についてさらに深掘りする、その先駆けになると言えよう。なお、政治と外交を中心に論じた『日台関係史 1945-2020 増補版』（東京大学出版会、2020年）も併読することで、日華・日台関係への理解をさらに深めることができると思われる。

本書で紹介されている日台関係を繋いだ3人は、すべて台湾の駐日代表（台湾の実質的な駐日大使）まで務めた方であるが、それぞれ異なる背景で日台関係にかかわっている。

林金莖は日本植民統治時代の台湾に生まれ、教育を受けたが、戦後になってすぐ上海の復旦大学、台湾大学に公費生として進学し、のち早稲田大学で修士号、亜細亜大学で博士号を取得した。外交官試験の合格後、1960年代から2001年まで外交官として、日本と台湾の間のほとんどの重大事案にかかわり、現場の実務に携わってきた。

これに対し、羅福全は林金莖と対照的な形で日本と台湾の関係にかかわった。教育を受けた羅福全は、戦後二・八事件と1950年代の国民党一党独裁体制を経験した後に、1960年から日本、米国へ留学した。米国留学中に、台湾独立運動の発展と拡大に関与し、国府のブラックリストにも載っていた。その後国連の職員となり、研究活動を進め、台湾における初の政権交代の際に駐日代表などの要職に就き、台湾の対日政策に参画して

きた。現職の駐日代表である謝長廷は戦後生まれ、林金莖と羅福全の次の世代にあたる。京都大学へ留学していた時、公害問題や文化財の保護に興味を持つようになった。やがて政治家として活動し、高雄市長に当選した後、高雄の環境問題と日本植民地時代の文化財の保護にも尽力し、積極的に日本の地方自治体との交流を推進してきた。2016年の駐日代表就任以来、さらに日本の地方自治体との交流を推進し、関係構築を進めてきた。

本書は単なる3人の駐日代表の生い立ちを紹介したものではなく、背景と世代を異にする3人がそれぞれどのように日本と台湾の関係を繋いだかを描き出している。また、台湾の民主化が日台関係にかかわるアクターの多元化をもたらしたことも、読者に理解してもらえるであろう。

『日台関係を繋いだ台湾の人びと 2』

浅野和生・編著

展転社 2018年 ¥1,870
ISBN : 9784886564702





『戦後台湾における
対日関係の公的記憶』
1945-1970s

深申 徹

国際書院 2019年 ￥7,040
ISBN: 9784877913014

被害者と加害者がその過去といかに折り合いをつけるか。戦後日華・日台間で蓄積されてきた経験は、一般的な歴史和解の模範となることはできなくとも、興味深い事例であることは間違いない。中華民国の台湾接收後から日華間の国交断絶までの1945～1972年を対象として考察する。



『日台を繋いだ
台湾人学者の半生』
楊合義回顧録

楊 合義

展転社 2020年 ￥3,080
ISBN: 9784886565037

政治大学国際関係研究センターの駐日特派員として日本に派遣され、良好な日台関係の構築に尽力した楊合義が、自らの半生を描く。台湾と日本の貴重な歴史の記憶が詰め込まれた回顧録であり、台湾現代史の資料としても有用な書。



『在日台湾人の
戦後史』
呉修竹回想録

呉 修竹／何 義麟・編

彩流社 2018年 ￥4,070
ISBN: 9784779125232

日本に住む華僑はつねに、北京政府あるいは台湾政府のどちらかへの支持を求められた。日・中・台の揺れる国際関係の中で未来の可能性を求め活動するも、ナショナル・アイデンティティを求めた在日台湾人にとって国民党も中国共産党も“偽い夢”と化す。戦後の日本、中国、台湾の歴史的関係を映す、在日華僑社会の核心にいた呉修竹による詳細な回想録。著作集・翻訳集も収録。



『日本と台湾
真実の戦後史』
語られなかった断交秘話

松本 成彦

ビジネス社 2021年 ￥1,760
ISBN: 9784828422534

中華民国「台湾」との国交断絶、日華断交から半世紀。だが、民間では良好な関係が築かれてきた。50年にわたって台湾との民間交流に携わり、人生をかけて台湾に愛情を注いできた著者が、日華断交の経緯を詳細に振り返りながら、その歴史を検証する。



『台湾人の歌舞伎町』
新宿、もうひとつの戦後史

稲葉佳子、青池憲司

紀伊國屋書店 2017年 ￥1,980
ISBN: 9784314011518

「らんぶる」も「スカラ座」も「風林会館」も台湾人がつくった——。終戦までの50年間、日本の統治下にあった台湾。8万人あまりが日本兵として戦争に駆り出され、戦前から日本に内地留学をしていた者も多くいた。戦後は一転、外国人として裸一貫で放り出された台湾人は、やがて駅前のヤミ市で財をなし、焼け野原に新たに構想された興行街・歌舞伎町を目指した。台湾人に焦点を当て、歌舞伎町の戦後史を綴った貴重な時代証言。



『交錯する台湾認識』
見え隠れる「国家」と「人びと」

陳 来幸、北波道子、岡野翔太・編

勉誠出版 2017年 ￥3,080
ISBN: 9784585226703

日本統治期から現在まで続く日台のつながり、日本で生活する「華僑」の現状などから台湾を知る。複雑な歴史と民主化・本土化に起因するナショナルアイデンティティのゆらぎ、世代で変化する価値観やイデオロギーなど、台湾の過去と現在、これからの可能性を提示する。



沖縄から考える台湾と日本 —地域間の視点で見えてくるつながり—

— 案内人 —
菅野敦志

沖縄出身以外のみなさんは、沖縄に行ったことはあるだろうか？ 行ったことがあるなら、どの空港から飛ばれただろうか？ 旅行以外にも、進学や仕事で沖縄に滞在したことがある身近な人もいるかもしれない。

じつは私の姉も、いまから30年ほど前に沖縄の興立芸術大学に通っていた。そして、私の初の沖縄訪問フライトは台湾からであった。私は高校のときに父親の仕事の都合により、台北のアメリカンスクールに在学していた。いまから30年前の1992年の夏、中正国際空港（2006年に台湾桃園国際空港に名称変更）から、まだ平屋建てで小さかった那覇空港国際線に到着した。

1時間ほどで到着することから、越境時の「国際」感は皆無であった。だが、わずか1時間で中国語から日本語に変わり、沖縄は私が暮らし台湾よりも南国感にあふれていた。1945年まで沖縄と台湾が同じ国に属していたことを、実際に双方を自分の目で見て考えた。そういえば台湾の空港で、沖縄は「琉球」としか表記されていなかった。台湾人に「沖縄」と言っても、「琉球」（リウチョウ）としか返されなかった理由も、あとになってから知った。

以上、私の個人的な体験から話を切り出したが、以下は沖縄と中華世界・台湾とのかわりについて簡単に紹介してみたい。「琉球」は、中国から命名された沖縄の名称である。ちなみに、琉球と中国との関係は、1372年に明朝の洪武帝が琉球に使者を送り、明朝に「入貢」するよう求めたことにさかのぼる。「入貢」とは、皇帝の権威を認め、その家来になることである。明朝の外交戦略は、周辺のアジア諸国に入貢をうながし、外交ネットワークを築くことを通じて、その権威を高めることであった。琉球は毎年中国に使節団を送り貿易を行っていた。

「琉球」という名称は、明朝の正史・『明実録』に登場するが、中国の歴史書には「流求」など、別の漢字でも確認できる。1429年には、尚巴志が統一権力を樹立し、「琉球

王国」が成立する。かつての沖縄は、「大琉球」と呼称され、一方の台湾は、「小琉球」として区別されていたとされるが、沖縄が「大」で台湾が「小」とは、台湾は九州よりも少し小さいだけなので、双方の面積を考えたらじつに奇妙ではないだろうか？ これは、琉球は広く中華文明を受容し、文化的な発達が中国から認められていたので「大」。対する台湾は、中国から見れば「教化」できない先住民族の存在もあって、中華文明の浸透度において「小」と見なされていた、と考えられている。

沖縄と台湾の関係は、こうした中国とのかかわりだけにとどまらない。その後、琉球は中国と薩摩藩の双方に両属を余儀なくされ、明治政府によって日本の領土に組み込まれることになる。こうした琉球／沖縄が日本となる歴史的結節点において、じつは台湾が決定的な役割を果たすのである。それが「牡丹社事件」（1874年、台湾遭害事件、琉球漂流民殺害事件などの名称もある）であった。これは、宮古島の役人ら69人を乗せた貢納船が、首里王府から宮古島への帰路に台風に遭い、台湾の東南部の沿岸に漂着したのであったが、台湾東部の牡丹社に住む先住民（バイワン族）に救助されるものの、のちに集落から脱出しようとした54人が先住民に殺された事件であった。生存者は12人で、福州経由で宮古島へ送還された。

当時、琉球国は薩摩の支配下にありながら、同時に清国とも冊封・朝貢関係にあった。明治政府は「自国民が殺害された」として、責任を清国に迫ったが、清国は「化外の地」の民による殺害と弁明した。明治政府は琉球の民＝日本国民であることを清国が認めたととらえ、国際法では国家は自国民を保護する責任を有する点を持ち出し、「自国民」殺害に対する報復処置として台湾に出兵した。これが、かつては両属状態にあった琉球が、日本の領土であると主張する根拠となり、1879年に沖縄県が設置された（いわゆる「琉球処分」）。ここからわかるように、沖縄が日本の領土とし



菅野敦志 すがの・あつし
共立女子大学国際学部教授

台湾現代史が専門です。当初は、戦後台湾の文化政策史・言語政策史の研究から始めました。沖縄に最初に行ったのは、台湾で暮らしていた高校生の時でした。その後、不思議な縁で沖縄の大学に採用され、10年間滞在したことで沖縄—台湾関係史にも研究範囲を広げ、近年では歴史和解やスポーツ史などのテーマにも取り組んでいます。台湾ではチェーン店の三商巧福（東京・赤坂に日本1号店があります）の牛肉麺を、沖縄では名産の我部祖河食堂のソーキそばをよく食べました。食後のデザートですが、台湾でよく食べた FOREMOST のアイスクリームが、沖縄の BLUE SEAL と同じ「家族」ということを知ったときは何だか感動しました。知らないだけで、つながっているものですね。

主な著書・論文

- ・『やんばると台湾——バインと人形劇にみるつながり』沖縄タイムス社、2018年
- ・『台湾の言語と文字——「国語」・「方言」・「文字改革」』勁草書房、2012年
- ・『台湾の国家と文化——「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』勁草書房、2011年

て併合されるきっかけは、まさに台湾にあったのである。

しかも、1894年に開始した日清戦争の結果、清国は日本に敗北し、1895年には今度は台湾が日本の植民地になった。それにより、海を隔てて隣同士である沖縄と台湾は、地域的一体性から密接な関係になっていく。明治30年代には「台湾熱」と呼ばれる現象が起き、沖縄からの渡台者は400～500人に増加した。大正期には約5千人、昭和10年代には約1万人となり、総じて、約1万5千～2万人の沖縄人が日本統治下の台湾で生活したという。

台湾の沖縄人、つまり在台沖縄人は、商業・教育・警察・農業・漁業などをはじめ、さまざまな分野で活躍した。台湾や台北（たいほく）は、植民地でありながら沖縄とは比較にならないほどの大都会であった。たとえば沖縄の女性が台湾に「女中」などで出稼ぎに行くと、「標準語」（現在では共通語）を身につけ、肌も色白になって帰ってくると評判になった。沖縄ではえることのできない専門的技術を学校で学び、社会的上昇を果たす者も少なくなかった。

1945年の沖縄戦では、1万4千人が台湾へ疎開したとされ、日本敗戦時には南洋からの引揚者や軍人も含めて約3万人の沖縄出身者がいたが、そのほとんどは沖縄もしくは日本本土へと引揚げた。同年の日本敗戦により、沖縄はアメリカ、台湾は中華民国の一省と、戦後は別国家の統治下に置かれることとなった。沖縄は1972年に「本土復帰」を果たすが、在日米軍基地（専用施設）の7割は沖縄に集中しており、台湾（中華民国）や中華人民共和国がともに領有権を主張する尖閣諸島（中国語名：釣魚台）は沖縄県石垣島に属するため、領土問題では緊張もはらんでいる。

那覇—台北間は、飛行機で約1時間＝約600kmである。一方、那覇—福岡間は約850kmなので、福岡に行くよりも台北の方がずっと近い。コロナ禍以前の来沖外国人観光客は、じつに約4割が台湾人観光客であった。台湾で沖縄について聞くと、「ビーチ」や「黒糖」といった答えが返っ

てくる。沖縄の地ビールである「オリオンビール」は台湾でも人気だ。沖縄から台湾の大学へ正規留学する者も増加傾向にある。

沖縄も台湾も、国際社会から国家として扱われる存在ではない。だからこそ、両地域をともに眺めてみると、既存の「国家」の枠にはまらない、地域間の視点で考えることの重要性に気づく。国家間で外交関係がなくとも、沖縄と台湾に多くの姉妹都市があるように。私たちはいつも「国」単位で物事を考えがちである。だが、沖縄から台湾を考え、台湾から沖縄を見てみると、国という枠組みに縛られることなく「違い」ばかりに目を奪われ、「同じ」ところが見えにくくなってしまっていたことを実感できるだろう。

沖縄ではよく「日本最西端の……」という看板や文言を目にする。だが、これを「日本で台湾にいちばん近い……」としてみたらどうだろうか。「すみっこ」や「周縁」を意味する「端」ではなく、隣人への「近さ」に目を向ければ、その地理的な優位性が感じられないだろうか。ぜひ、「日本の周縁・沖縄」ではなく、「台湾にいちばん近い島々・沖縄」として、「東アジアの中心」としてのイメージを、みんながまっさきに思い浮かべられるようになってほしいと願っている。

『大日本帝国植民地下の琉球沖縄と台湾』

これからの東アジアを平和的に生きる道

又吉盛清

同時代社 2018年 ¥4,180
ISBN: 978486838315



本書は、『日本植民地下の台湾と沖縄』（沖縄あき書房、1990年）をベースに加筆修正を加えた、著者による長年の研究の集大成である。沖縄から日本統治下の台湾へは、1907年に1,000人、1930年に5,000人、第2次世界大戦終結時には（戦時疎開者も含め）30,000人へと膨れ上がっていたが、そうした台湾にとっての隣人である沖縄から移動した人々は、台湾でどのように生き、そして日本による植民地統治を支えたのか。

そもそも著者は、琉球国が併合されて日本人となった沖縄人が、虐げられ差別された立場から、台湾では統治側、すなわち加害者として生きた事実に着目する。沖縄出身者として受ける差別を嫌って他県に転籍する人や改姓名をした者もいたが、京都帝国大学を卒業して台湾総督府鉄道部技師となり、沖縄に戻り那覇市長となった照屋宏（1875～1939）のように、誇りを捨てずにそのような行為を選択しなかった人もいた。日本による台湾の植民地支配の実相がどのようなものであったのかについては、日台の間に生きた琉球／沖縄出身者の抱えていた葛藤を知ること、その多様な内実への理解に近づ

けることを、本書を読み進めるにつれて実感できるだろう。

著者は、植民地下の台湾に関する書籍について、「その大半が賛美的なものが多く日本国の植民地支配に対する自省が見られない」（P.15）ことを強く問題視し、本書の出版にいたったという。現在では人気の旅行先となっている沖縄と台湾だが、双方の歴史的なかわりには強く、深く、そして深海をのぞき込むかのように暗く映る部分もある。そこには、当然ながら目をそむけたい歴史もあるだろう。だが、そうした負の歴史を私たちが正面から見つめ、語り継いでいくことでこそ、過去の教訓を踏まえ、望ましい未来を他者といっしょに描いていくことができる。東アジアとともに生きる私たちがとしての自覚があってこそ、「平和的に生きる道」を見いだすことができる——そうした大切なメッセージを伝えてくれる1冊である。

『やんばると台湾』

パインと人形劇にみるつながり

菅野敦志

沖繩タイムス社 2018年 ¥880
ISBN: 9784871276795



やんばる（山原：沖縄北部の別称）には、名護バイナッブルパークという観光スポットがあるが、読者のみなさんは行かれたことはあるだろうか。じつは、このやんばるのパインにも、台湾との深いつながりがある。本書は、戦前の台湾における居住経験とつながりをもとに戦後東村にパインを導入し、同村を沖縄北部地域におけるパインの名産地だけでなく、「日本一のパイン村」に育てあげた元東村長の宮里松次・ミエ子夫妻を紹介する。続いて、台湾の人形劇団に弟子入りし、沖縄の文化要素を組み込んだ独自の人形劇を展開する名護・屋我地島の人形劇団「かじまやあ」の桑江純子さんを紹介し、これらふたつの事例から、やんばる地域と台湾の知られざるかわりを伝える。

東村は年間1,000tの生産量を誇る「パインナップル生産量日本一」の村である。だが、この「日本一」には、台湾から戦後に引き揚げた宮里松次と“湾生”（台湾生まれの日本人）である妻・宮里ミエ子の功績があった。ふたりは1950年代から東村にパイン栽培を普及させていったが、その背景には、台湾時代に覚えたパ

インの味を沖縄で再現すべく、台湾時代の部下であった台湾人の力を借りて進めた事実があった。一方、桑江は1984年に台湾の伝統人形劇である布袋戲（掌中戯）・西螺新興閣掌中劇団の鍾任堅団長に弟子入りし、台湾で学んだ技術に沖縄独自の文化と言語（うちなーぐち）を加えた。台湾の布袋戲の技術を基盤に、「新しい沖縄の人形劇文化」を創造した桑江は、劇を通じてうちなーぐちの復興に尽力し、文化芸術の面で高い評価を受けている。

本書は、「日本一」を誇る農産物、そして舞台芸術にも、じつは台湾との密接なつながりが存在していることを、沖縄北部の事例から紹介している。そこに共通するのは、台湾に対する深い感謝の気持ちである。コロナ禍の中でも、台湾からは沖縄や日本本土に大量のマスクが届けられ、感謝の気持ちが広がった。あなたもやんばるから台湾とのつながりを感じ、この「互恵と感謝の物語」を周囲の人たちに共有してみてもどうだろうか。

ジョージ・H・カー（1911～1992）という人物について聞いたことはあるだろうか？ おそらく研究者以外でその名を知る人はそう多くないかもしれない。カーは、台湾でも沖縄でも、歴史研究に携わった人であれば耳にしたことのある著名な人物である。アメリカで牧師の息子として生まれたカーは1935年から37年まで日本に留学、1937年から40年まで日本統治下の台湾で英語教師を務めた。第2次世界大戦終結直後に台湾に戻った彼は外交官となり、その後アメリカで大学教授となった。沖縄と台湾の歴史で著作があり、沖縄タイムス社（新聞社）からは、その功績に対して感謝状が贈られているほどである。

本書は、「沖縄と台湾を愛した」カーを偲ぶ、沖縄と台湾の識者による寄稿で構成されている。沖縄からの寄稿者には、私が前任校でお世話になった瀬名波榮喜・名桜大学名誉学長や、川平慈英とジョン・カピラの父親である川平朝清などが名を連ねる。沖縄はアメリカ軍に占領され、1945年から72年まで米軍統治下にあり、「本土復帰」以降も多くの米軍基地が残る。米軍による犯罪も少なくなく、普天間基

地の名護市辺野古への移転をめぐる反対運動も続いている。そのため、沖縄とアメリカの関係性は、対立のイメージで描かれがちであるし、台湾はもっぱら「有事」の可能性で引き合いに出される。けれども、一人ひとりの人物とその足跡に目を向けてみたとき、そうした対立だけでは理解できない、他者に対する深い理解と共感をもって行動し、沖・台の双方の人々に慕われたアメリカ人の存在から気づかされることは少なくないだろう。

国家間の国際関係で単純化されがちなイメージも、カーの存在をとおしてみると、人によってつながる沖台米の交流史と関係性が浮かび上がってくる。ちなみに、私は山形県米沢市出身であるが、2代目沖繩県令（現在の県知事に相当）となった米沢の上杉茂憲は、沖縄の教育推進に力を注いだ。その功績は現在でも語り継がれており、その姿がカーに少しだけ見えた。

『沖縄と台湾を愛したジョージ・H・カー先生の思い出』

比嘉辰雄、杜 祖健・編著

新泉出版 2018年 ¥1,980
ISBN: 9784909366078



『沖縄の植民地的近代』

台湾へ渡った人びとの帝国主義的キャリア

松田ヒロ子

世界思想社 2021年 ¥4,180
ISBN: 9784790717546



「日系人」と聞くと、どのような人々を思い浮かべるだろうか。じつは、世界の日系人の多くは沖縄出身者である。北米や中南米の日系移民の中でも、本土出身者と沖縄出身者にはさまざまな差異があり、両者を同一に扱うことはできないが、北米や中南米への日系移民については、あくまで外国への移民であるため、本土／沖縄出身者にかかわらず、現地での差別を乗り越えてたくましく生きたサクセスストーリーはよく耳にするところである。

だが、本書が扱うのは、そうした語りとは逆に、日本が帝国だった時代に植民地台湾へ移動して社会的上昇が図られたものの、民族差別が公然と存在する植民地下で「日本人」「琉球人」「台湾人」（当時は、1等国民が日本人、2等国民が琉球人、3等国民が台湾人と言われた）の序列の中で、単なる被害者ではなく加害者としても生き、日本の敗戦とともに多くを失い沖縄に引揚げてきた沖縄出身者の姿である。

帝国日本の中でアイデンティティの葛藤に苦しんだのは、台湾人だけではなく、沖縄出身者も同様であった。とはい

え、日本人として台湾人よりも高い給与をえることができ、帝国日本の支配を支える側、すなわち役人・警察官・教師といった公務員の職に就くことができた点は、過酷な農作業や小売業などの末端の職しか選択肢がなかった北米や中南米への沖縄移民とは大きく異なる。

人は、よりよい収入、職、生活を求めて移動し、海を渡る。今日の沖縄で、もっとも身近な都会に進学や就職をするとなれば、ほとんどの人はまっさきに九州、とりわけ福岡をあげるだろう。けれども、歴史をほんの少しさかのぼれば、それは台湾であり、台北だったのだ。「海外雄飛」という言葉が抱える、光と影の二面性——帝国主義にのみ込まれつつも、さらなる膨張の一翼を自らが担い、戦後は植民地でえた知識と経験をいかして沖縄の再建に貢献を果たすという、葛藤を生きた沖縄の人々。複雑に絡み合う台湾と沖縄の近代史を知ること、そもそも日本がどのような近代を形づくり、同化による膨張の道を突き進んでいったのかを振り返り、その歴史が持つ意味と重みを改めて考えるよい機会になるだろう。



『沖縄処分』 台湾引揚者の悲哀

津田邦宏

高文研 2019年 ¥3,080
ISBN : 9784874386820

1945年8月——日本の敗戦後、沖縄の領土化を目論んだ中国国民党政府は台湾から引揚げる沖縄の人たちを「琉球人」とみなした。日本政府は異論を挟まず、明治時代の「琉球処分」によって「日本人・沖縄県人」に組み入れた人々を再び琉球人として突き放した。この「沖縄処分」を読み解き、今日に続く「構造的沖縄差別」の根源に迫る。



『〈あいだ〉に生きる』 ある沖縄女性をめぐる 経験の歴史学

富永悠介

大阪大学出版会 2019年 ¥6,050
ISBN : 9784872596359

第2次世界大戦を挟む激動の20世紀に翻弄されながら、沖縄と台湾を舞台に生き抜いた女性・宮城菊。彼女が記したノートと聞き取り、周囲の関係者へのインタビューから菊の半生をたどることで、台湾・沖縄・朝鮮半島・日本の関係史を描きなおし、人が「生きる」こと、「生きたこと」の証をとらえなおす。国、言葉、貧困、戦争、信仰——さまざまな〈境界〉の中で生きる人々から見える、新たな歴史像。



『多層性と ダイナミズム』 沖縄・石垣島の社会学

関 礼子、高木恒一・編著

東信堂 2018年 ¥2,640
ISBN : 9784798914794

石垣島の歴史的特徴でもある八重山諸島や沖縄本島、台湾からの移民などの動態的な人口構造は、2013年の新石垣空港開港による本土とのアクセス向上が進むいまでもなお、バラエティに富んだ石垣独自の社会形成に大きくかかわっている。石垣における歴史、地理、産業、地域コミュニティなど多角的視野から動的な石垣社会のダイナミズムをとらえ、石垣が独自につくり上げてきた社会の実態とそこでの生活世界を眺望する。



『与那国台湾往来記』 「国境」に暮らす人々

松田良孝

南山舎 2013年 ¥2,530
ISBN : 9784901427302

「日本が台湾を統治する前から、八重山や与那国など沖縄一帯から多くの漁民が（中略）亀山島付近の海域で魚を捕り、近くの蘇澳（台湾東海岸の宜蘭にある漁港）で魚を売ったあと、日用品をいくつか買って戻っていった」。与那国島と台湾はこんなに近い関係だった。111kmの海に縋りなされた、「往来」の航跡。その行きかう姿が、体験者たちの証言で浮かび上がる。



『緑の牢獄』 沖縄西表炭坑に眠る 台湾の記憶

黄インイク／黒木夏見・訳

五月書房新社 2021年 ¥1,980
ISBN : 9784909542328

歴史の狭間に埋もれていた衝撃の史実。10歳で台湾から炭鉱のある沖縄・西表島へ渡り、以後80年以上島に住み続けたひとりの老女。彼女の人生の最期を追いかけて浮かび上がる、家族の記憶と忘れ去られた炭鉱の知られざる歴史。現代日本人がもっとも注目するふたつの場、台湾と沖縄。日本人が悪い出さなければいけない歴史の原点を掘り起こす。



台湾から見た日本 ——「哈日」、疑似恋愛、そして時々メランコリック——

謝 恵貞

「哈日」族はいかにして鍛えられたか

はっきり言っておく。「日本のポップカルチャーを積極的に受容する台湾人」を意味するこの言葉が誕生する以前から、私は哈日族だった。そして、日本の国立大学で博士号を取得した私のような哈日族がいかに「養成」されるかは、『記号化される日本——台湾における哈日現象の系譜と現在』（張瑋容、ゆまに書房、2020年）を一読すれば、その軌跡が見えてくる。

芸能産業の規模が小さい台湾では、日本がエンタテインメントの重要な輸入元であった。ドラマ、アニメ、漫画、J-POP……宮崎駿のアニメを観ない台湾の子どもはいないぐらい、日本への依存度は高い。また、日本統治期の台湾人と同じように、私も幼少期から、日本語という眼鏡をとおして、日本文化だけでなく、世界最先端の技術、絵画、音楽などに触れ、私の目に世界はまるで万華鏡のように映った。中学・高校に進学する際は、ストレス発散のためMr. Childrenや宇多田ヒカルの歌をリピートして自分を励ましたし、日本のアイドルの髪型をマネしたり、初音ミクの関連グッズを集めたりもした。そうした行動を、張氏は「疑似恋愛のような感情移入」と分析する。自分の経験を振り返っても、「なるほど!」と合点がいく話が満載だ。

また、私が高校時代に読みふけた村上春樹作品はこれから始まろうとしていた人生の案内書のように、その哲学はまだまだ私に影響を与えている。小さいけれど確実な幸せを意味する「小

確幸」という村上の造語が流行したこと、筆者が手がけた検定問題『大人の村上検定』（台北：聯經）が重版となったことも、日本文学の影響力の一端を物語っている。

「日本をめぐる集会的想像の形成過程において、台湾の理想像が浮上する」という張氏の研究をふまえて言えば、台湾の若者の理想的な恋愛像や自己認識には、日本文化の影響がつねにある。一方で、現実の日本と触れ合い、両者のズレに出会ったとしても、ファンタジーのように、重層的に存続するという。

いますぐにでも飛び立ちたい、「我的日本」へ!

コロナ禍が3年目を迎えた2022年6月、日本政府から段階的に訪日観光客の受け入れを再開するとの発表があった。このニュースは街中を駆けめぐり、「いますぐにでも日本に飛び立ちたい!」と台湾中から興奮の声が上がった。その背景にあるのは、台湾人がもっとも旅したい国のひとつが日本であるという事実である。台湾人のこの気持ちは、「我的日本——台湾作家が旅した日本」（白水社、2018年）を読めばよく理解できる。

本書には、王聰威、伊格言など、台湾文学の一線で活躍している作家たちの日本旅行記が収録されている。日本への思い入れ、ノスタルジックな情緒、日本文学・映画・ドラマへの興味。作家たちはそれぞれの感性で、金沢、京都、仙台、熊本、大阪などをめぐり、作家ならではの旅を書き記した。たとえば、「夫と子どもを捨てて、何もしないで過ごす革命の旅」を記した劉叔慧、孫梓評は三島由紀夫『潮騒』（新潮文庫）をリュックに忍ばせ鳥羽を旅した。寺院を巡らした作家も多く、金屏風、千歳松、精進料理などへのまなざしからは、日本の伝統文化を堪能し、心酔する様子が伝わってくる。

一方、日台の歴史的なつながりへの想いを綴った呉明益は、高見順が『敗戦日記』（中公文庫）に記した戦時中の噂話や験担ぎについて「金魚に命を乞う戦争」にまよめ、戦争の罪を考えた。東京で東日本大震災に遭った陳柏青は、お台場を舞台にしたドラマがいかにか自分の青春時代に影響を与えたかを述べた。震災後の福島を取材したのち、北鎌倉で小津安二郎の墓を訪ねた胡慕情は、村上春樹『羊をめぐる冒険』（講談社文庫）の一節を思い出し、リアルタイムで日本の歴史的な現場に立ち会っ

た心境を語った。

台湾色の眼鏡で日本という国の歴史や文化に目を向ける。それはきっと、新しい発見につながるに違いない。

台湾における日本認識の「アンビバレンス」

2005年、念願の日本留学を果たした哈日族の私だが、留学中、日本への気持ちちが片思いだと感じたこともある。たとえば、戦前日本の植民地統治の歴史を知らずに、台湾人は「親日」だと言う日本人の方と出会ったとき、私はいつも寂しい思いをした。日本人の台湾認識は、戦後台湾の政治変動の影響もあり、理解が追いつかず、希薄なままだからであろう。

それに対して、『台湾における〈日本〉認識——宗主国位相の発現・転回・再検証』（三尾裕子・編、風響社、2020年）は、自覚的に上記の歴史背景を踏まえ、台湾の人々及び日本人の歴史認識に迫り、被支配者だった台湾人が「日本」とどう向き合い、どのような文化創造を行なったのかを、歴史学と人類学視点から示してくれる1冊だ。本書は「台湾東部における漁撈技術と日本」「真宗大谷派による台湾布教の変遷」「佛光山からみる、台湾仏教と日本との関係」などの事例を取り上げ、台湾の庶民生活に取り入れられた「日本」がいかなる意味を紡ぎ出しているかを紹介する。また、戦前の台湾風俗を記録した『民俗台湾』や『台湾雑誌』など貴重な資料を取り上げ、日本統治下の台湾言論空間を再検証している。

とくに傾聴に値するのが、日本留学経験者の黄智慧による「台湾における『日本文化論』に見られる対日観」だ。大量の文献調査をもとに、（1）外省人の「侵略される側の日本観」と本省人の「植民される側の日本観」は多元的なベクトルを持つ、（2）「植民される側の日本観」は中国語よりも日本語で出版されたものが多い、（3）日台関係を軸とした日本文化論は日本の発展に寄与できる、（4）日本流行文化は台湾に根を下ろしているが、戦前の権力関係と訣別する姿勢も必要だという4つの提言がなされている。

「哈日」がゆえに日本に留学した私が、歴史的な葛藤を抱えながらも多くの友人をつくることができたのは、三尾氏のような日台の歴史と真摯に向き合ってくれる友人が存在したからだ。

負の歴史を繰り返さないため、腹を割って語り合える友情を育むことが、相互理解を深めると信じている。

両想いの恋がしたい

私の複雑な気持ちを理解しつつ、台湾人がなぜ親日ののかについてもっと知りたければ、『台湾メディアと日本——日本へのまなざし』はどのように生み出されているのか（八幡耕一・楊韶・編著、晃洋書房、2020年）を読んでみてほしい。マスメディアからソーシャルメディアまで、台湾社会で「日本への関心」が生み出される構造が解説されている。

本書は日本の健康食品への高い信頼や、福島原発事故以降の日本食品輸入問題など、いまのリアルな台湾人の声とそれにかかわる研究で構成される。また、台湾での日本関連報道、たとえば2018年の「関西国際空港の送迎問題事件」、安倍元首相の中国訪問報道などが分析、解説されている。

人気のある観光地だが、「近くて遠い国」。日本人の台湾に対する現状認識を打開するための論点が、本書には示されている。編著者の八幡氏は、日本で流通している「台湾は親日の国家」という考えの背後には、「日本の台湾統治が残した功績は大きい」という認識が見え隠れしているとし、その認識には歴史的な観点と日中台の複雑な外交関係への視点が足りない指摘する。また、日本の「台湾へのまなざし」と、台湾の「日本へのまなざし」との非対称性を検証し、日台関係に「双方向性」が求められると提言する。

確かに、恋愛でも相手の好意を拡大解釈してしまえば、ふたりの関係はバランスを失い、複雑でメランコリックな感情に発展してしまう。台湾からの熱い「日本へのまなざし」の背景に「何があるのか」と想像を働かせ、相手に好奇心を持つところ、よりよい関係を築く秘訣だろう。

台湾にとって、日本はすでに重要な他者となっている。2016年、芥川賞作家の又吉直樹が『歩道橋の魔術師』（呉明益、白水社）を日本のテレビ番組で紹介し、同作は本屋大賞「翻訳小説部門」第3位に輝いた。以来、日本の読書好きから台湾への熱い視線を感じつつ、両想いの日台関係実現を予感している。

謝 恵貞

しゃ・けいてい

台湾 文藝外語大学
日本語学准教授



主な著書

- ・『機光利一と台湾——東アジアにおける新感覚派の誕生』ひつじ書房、2021年
- ・『旅する日本語——方法としての外地巡礼』共著、松籟社、2022年



『記号化される日本』

台湾における哈日現象の系譜と現在

張 瑋容

ゆまに書房 ¥8,800 2020年 ISBN: 978483356807

「哈日族」の動向について歴史をひも解き、フィールドワークと理論的分析を重ねながら、台湾人の親日感情構造を分析する。日本化→脱日本化・中国化→日本化というマクロ的な流れの中で、台湾人の中の多様な日本のイメージの変化を「記号化」として読み取っていく。



『我的日本』

台湾作家が旅した日本

呉 佩珍、白水紀子、山口守・編訳

白水社 2018年 ¥2,090 ISBN: 9784860096680

日本と歴史的に深くつながり、親日でも知られる台湾。日本が好きで何度も訪れている台湾作家も多い。日本を旅する台湾作家たちはどこへ向かい、何を目にし、何を思うのか。現在活躍する1952年～89年生まれの台湾作家18名による、日本紀行のオリジナルアンソロジー。



『台湾における〈日本〉認識』

宗主国位相の発現・転回・再検証

三尾裕子

風響社 2020年 ¥2,750 ISBN: 9784894891760

台湾人の瞳に映ってきた「日本（人）」像を総括。50年に及ぶ植民地経験がもたらしたものは何か。戦後60年の歳月の中で訪られてきた「他者像としての日本」とその「支配」。2005年の国際ワークショップで、多様な事例をもとに報告されたアジアにおける日本の「実像」。



『台湾メディアと日本』

「日本へのまなざし」はどのように生み出されているのか

八幡耕一、楊 韶・編著

晃洋書房 2020年 ¥3,850 ISBN: 9784771033238

親日的とされる台湾社会において、「日本」という記号を拡散してきたメディアの功績は大きい。日本・台湾・中国の若手研究者が、台湾メディアの第一線で働く関係者への聞き取りと、日本に関する商品広告や報道の内容分析から解き明かす現代台湾メディア論。

東京大学文学博士。台湾・文藝外語大学日本語学准教授。専門分野は日本統治期台湾文学・日本語による越境文学。村上春樹ファンで、ご本人から村上 Radio ネーム、「麦頭元年」を頂戴。蔡南杉というペンネームで作家活動もしている。村上春樹、東山彰良、温又柔、李琴峰などの作家に関する評論・翻訳やインタビューも数多く手がけている。最近では、初音ミクの歌詞や詩の創作などの詩人活動で、台湾の全国優秀青年詩人賞を受賞。日本語の素敵な言葉たちを取り入れ、文章や詩を紡ぐことについてトキメキ! 今年の誕生日の願いごとは、世界平和と、コロナが収束し、日本に行きたい!

日本統治時代をどう考えればいいのか？

—「過去」を語る「現在」—

— 案内人 —

洪 郁如

日本統治時代とは、1895年から1945年まで台湾が日本の植民地として支配下に置かれた時期を指す。日本統治時代をどう考えればいいのか。これは、真摯に向き合うほど答えが見えなくなる難問である。近年の調査では、日本と台湾は互いに「もっとも親しみを感じる国」となっている。相思相愛と言われるほど良好な関係だが、両者の関係にはある種のモヤモヤ感が漂うことが意外と多い。そのモヤモヤは、日本統治時代のとらえ方に深くかかわっている。

10年ほど前、台北で聞き取り調査を行っていた私は、ある学校の同窓会の宴席に混ぜてもらった機会があった。食事のあと、彼女らの昔話に耳を傾けていると、日本統治下の台湾で女子教育の最高学府を出た女史たちは、日本人からの差別の有無について珍しく議論し始めた。彼女らは優雅な日本語を操り、ときどき台湾語を交えながら話す。「差別なんてまったくなかったわ。先生たちも友人たちもみんない人ばかりだったし」と、口にした女史がいた。すると別の女史がその言葉を打ち消すように、何名かの日本人教員の名を挙げながら、自分の受けた待遇について不満げに語り始めた。一座はにわかにザワついた雰囲気となり、何も語らず黙々と帰宅の支度を始める人さえいた。戸惑いを隠せない私に、ひとりの女史が、「あのね、私たちの親は特別な階層の人だということを、日本人はもちろん知っている。だから私たちも優遇されていたのよ。でも、田舎に行けば、全然違うよ」と耳打ちしてくれた。その瞬間、私は海辺の村で暮らす自身の伯母のことを思い出した。1923年生まれの彼女が唯一知っている日本人は警察だった。その印象を尋ねたとき、彼女は「エガケンオ！（人を殴るぞ）」と声に力を込めたのだった。

日本統治時代という歴史的経験のとらえ方は、同じ台湾人の間でも世代、階層、民族的出自によって大きく異なる。それだけではなく、同じ人であっても、回想する時間や場所、あるいはそれを語る言語によって正反対とも思われる

ほどの答えが出てくる。このような事情があるにもかかわらず、日本で広く流通する台湾の日本時代の解釈は、あまりにも単純化されている。

日本社会が台湾の歴史、とりわけ日本統治時代を意識するようになったのは比較的近いことで、一般の人が台湾を知る機会はいまだに十分に整備されているとはいいがたい。料理でもデザートでも「台湾」の2文字をつければ売れる時代だと言われている。だが、筆者がよく知る大学での教育現場について言えば、日本全国の大学で科目名に堂々と「台湾」の2文字を掲げた授業は、数えるほどしかない。どの大学でも開講さえすれば、教室に学生があふれるほどの大盛況となるにもかかわらず。この需給バランスの悪さの大きな理由は、戦後の長い間、東アジアの地政学と日本の政治外交に起因する「国の事情」が、大学のカリキュラムにまで影響を与えてきたからである。カリキュラムは大幅な改変を避け、機械的に継承されるのがつねだし、大学という場がさまざまな政治的影響を受けることもまた無理からぬことである。高校以下の教育現場では、台湾との接触はなおさら少なくなる。

そして今日、私たちはより危機的な状況に直面している。地道に学ぶことがままならぬ中で、台湾にまつわる俗説、自説、学説が、タビオカ店の林立に負けないくらいの勢いで押し寄せている。台湾は「親日国」というイメージが広まり、多くの人がかつて台湾にあったという「日本統治時代」に興味を持ちはじめた。しかし、そうした関心の多くは、台湾の「親日」が形成された理由を、日本統治時代に求めようという発想に陥りがちだ。そして、この潜在的な需要に応じるかのように、書店に並ぶ数多くの台湾関連書籍は、日本統治時代を台湾に「近代化」をもたらした誇り高い時代として喧伝している。

じつは、日本だけではなく台湾でも「日本の台湾統治」＝「近代化」＝「進歩」＝「よいこと」を一直線でつなげ



洪 郁如 こう・いくじょ

一橋大学大学院社会学研究科 教授

専門は台湾近現代史。台湾大学法学院政治学系卒業後、1992年に日本台湾交流協会の奨学生として日本留学。東京大学学術博士。来日年数が台湾を離れたときの年齢を上回ったことに気づいたとき、ここが自分の第2の故郷だとあらためて実感した。歴史の旅を好む。故郷の彰化県にある1895八卦山抗日保台史蹟館は、台湾で唯一「抗日」の名を冠した見学先として希少である。日本国内では、下関市の日清講和記念館が台湾の運命に思いを馳せることのできる特別な場所である。本業と関係のない旅先としては佐渡島の宿根木の夏の蛙たちの鳴き声が印象に残る。

主な著書・論文

- ・『誰の日本時代——ジェンダー・階層・帝国の台湾史』法政大学出版局、2021年
- ・『近代台湾女性史——日本の植民統治と「新女性」の誕生』勁草書房、2001年

て語る人が少なからずいる。けれども、単純な図式を鵜呑みにすることはあまりにも危険である。台湾の場合、台湾史を体系的に学べるようになったのは1990年代末以降のことである。歴史学者や教育現場の努力は続いているが、自らの歴史を主体的に認識するための知識の普及は、台湾でも人により、世代によりばらつきが大きい。パソコンにたとえれば、最新版のOSに随時、更新する者もいれば、'90年代のWindows 3.0からまったくアップデートしていない強者もいる。

検証もなく語られる「日本の台湾統治」の俗説が多い中、帝国中央の政策決定のメカニズムから植民地の現場の展開までを1次史料にもとづき丁寧に検証する書物も少しずつ増えている。鉄道、水利施設、学校などは従来、台湾総督府のインフラ建設の目玉となる業績とされてきた。これらにつき、研究者たちは帝国中央や台湾総督府の意図、そして現地の台湾人社会と日本人社会それぞれの反応、抵抗、矛盾などに目配りしながら、現場で繰り広げられた植民地政治の様相を、複眼的かつ詳細に解明している。日本統治時代を正確に理解するために、こうした良質な研究の成果にぜひ触れていただきたい。

日本統治時代をどう考えればいいのか。第1に、「親日」の証拠探しを避け、巨視的に歴史をとら直すことをおすすめする。帝国が植民地台湾に求めたものは何か。近代日本の国家形成の過程を広く考える必要がある。また、日本統治時代は今日の台湾を構成する重要な歴史段階だが、唯一の要素ではない。台湾の中の日本に重きを置き過ぎることによって、過剰な自意識が生じる危険性もともなう。日本による「近代化の貢献」を見いだそうとすることは、結局のところ、無自覚な自分探しに終始しやすいのである。

第2に、英雄譚から距離を置き、その代わりに個人の歴史と帝国植民地の歴史を重ね合わせながら再考すべきである。個人と家族の歴史によって大きな歴史を相対化すると

同時に、個人や家族の経験と感情を大きな歴史の中に還元し文脈化することで、初めて歴史の「実相」に迫ることが可能となる。日本人にとっての台湾時代、そして台湾人にとっての日本時代は、1895年以降、帝国という巨艦に乗り込み植民地におもむいた老若男女の一人ひとりおよび家族の物語であると同時に、台湾の人々がその巨艦でやってきた日本人々々に出会った物語でもある。支配と被支配という非対称な権力構造の中で展開された人間模様を、単に「善人」「悪人」でレッテル貼りすることは困難であろう。より深く理解するために、戦前の台湾に生きた日本人と台湾人の回想録を読むこともひとつの手である。物語を単純化する誘惑に抗い、はめられそうではめられないピースや、紛らわしいピース、壊れたピース、見つからないピースをゆっくり組み立てるうち、日本統治時代という1枚の絵が徐々に像を結んでくると信じる。

「過去」という時間の認識は、眼前に展開する「いま」の政治変動と共鳴しつつその姿を変える。激変する東アジアの政治環境の中で、「日台の絆」を相互確認し、強化するムードが高まる。「日本統治時代」の語りは、「近代化」を主旋律にすることで、もっとも聞き心地のいいものとなる。逆に、植民地支配下の差別、暴力、抵抗など、「マイナス」の部分を提起することは、「都合が悪い」、「空気を読めない」、「友情を害する」などとしりぞけられがちだ。だが、多くの人々が日台関係に感じるモヤモヤは、まさにここから来ている。未来につなげていける確かな友情を育むためにも、「気まずさ」を避けるのではなく、互いに大事にしている親友だからこそ、私たちの過去を正視し、語り合う時期に来ていると思う。

『韓石泉回想録』

医師のみた台湾近現代史

韓 石泉／韓良俊・編注／杉本公子、洪 郁如・編訳

あるむ 2017年 ¥2,750
ISBN : 9784863331327



表紙の家族写真に目を惹きつけられる。伝統服を身に着けた気品ある若き日の韓石泉夫妻。妻の膝の上に乗るぽっちゃりした男児、夫の前で人形を抱える可愛らしい女の子。しかし1929年の写真撮影時、1歳に満たなかった長男良哲は数カ月後に肺炎で亡くなり、2歳だった長女淑英は1945年3月1日に女子救護隊の一員として出動中、連合軍による台南大空襲に遭い、18歳にしてこの世を去った。幸せに見えた家族は、波瀾万丈の台湾近現代史を歩んでいく。

韓石泉は、日本の台湾統治開始直後の1897年生まれ。漢学の素養を持ちながら、同時に日本の学校教育も受け、医師として務めたのち、熊本医科大学に留学、医学博士号を取得した。回想録に記された少年期から青年期にいたる韓の人生は、まさに日本の台湾統治とシンクロナイズする形となった。

この回想録の醍醐味は、歴史の現場に立ち会った「大人の視点」から、植民地統治、戦争、日本統治の終焉、国民党政府の到来が描かれている点だ。1945年に韓石泉は48歳を迎えた。これまでに日本で出版された台湾人の自伝や回想録

は、いわゆる「日本語世代」によるものが多かった。彼ら・彼女らの多くが1920～30年代生まれの世代であるのに対し、本書の著者は、ほぼひとつ上の世代ということになる。清朝統治下の台湾社会の空気が、大人たちの日常生活にまだ色濃く残っていた頃に幼少期を過ごしている。日本による武力制圧が一段落し、台湾領有が軌道に乗った頃に過ごした青少年期。戦争中、さらに戦後、中華民国に接収されたあとの激動の政治と重なった壮年期。

本書前半は医師、政治家としての韓石泉が見た台湾近現代史と言ってもよい。後半に収録された彼の子どものたちや友人たちによる追念文は、世代間の対話として一読の価値がある。また日本では知られていない第2次大戦下の台南大空襲の実態、そして家族の記憶のつまった「韓内科」と台南の町の描写も興味深い。

『植民地台湾を語るといふこと』

八田與一の「物語」を読み解く

胎中千鶴

風響社 2020年 ¥770
ISBN : 97848944898028



コロナ禍に入る直前、台湾は日本の高校修学旅行の海外の目的地ランキングで首位を占めており、2018年には5万人超の高校生が台湾を訪れた。短い滞在期間の関係で見学地のほとんどは台北に限定されていたが、それでも一部の高校は中南部にも足を延ばしている。気になるのは、しばしば行程に組み込まれている人気スポットのひとつ、台南市の烏山頭ダム の存在である。この貯水ダムを含む嘉南大圳という水利灌漑施設の設計と現場監督に携わった土木技術者こそが、本書のフォーカスである八田與一である。修学旅行の日本人生徒たちは、1930年に竣工したこのダムのみならず、復元された家屋や記念室も設けられた「八田與一記念園区」も見学する。2010年代以降、大手の中学歴史教科書などに八田が登場したことも、八田ツアーの人気に拍車をかけることになった。郷土の偉人、真の国際人、台湾に近代化をもたらした日本人として、八田の物語は義務教育の現場にまで広がったのである。

なぜこのような現象が起こったのか。本書は八田にまつわる「物語」の形成に焦点を当てている。1980～90年代に

日本において八田がどのように「発見」され、今日にいったのか、その経緯を著者は詳細に洗い出している。物語に付随する植民地主義的な歴史観に、深い疑念を提示している。八田の物語は時とともに消失するどころか、インターネットなどをとおしてさらに拡散しつつあると、著者は巻末の付記でも嘆いている。台湾側における物語のあり方にも、本書は注意を払っている。語る文脈の相違、国際交流や観光資源化など、裏舞台では複合的な要因も働いている。

日本のある高校の事前学習では、「台湾でもっとも有名な日本人は？」との出題があった。正解は教科書に取り上げられた「八田與一」である。あるとき台湾の大学で講義を行なった際、私がこのエピソードを紹介すると、学生たちは言葉 を失った。そうした意味でも、本書は日本の中学・高校の図書室に必須な1冊だと思う。

台湾総統府は、台北を訪れる日本人観光客にとって印象に残る建築物のひとつである。ガイドブックや現地では、これが1919年の日本統治期に建てられた、旧台湾総督府であることが強調されている。しかし本書が読者に伝えようとするのは、総督府の建物としての様式美ではなく、そこに鎮座していた歴代総督のあり方と、ここを中心として展開された日本の台湾統治史である。

著者の黄昭堂（1932～2011）は台湾の台南市に生まれ、台南一中を卒業後、台湾大学に入学、その後、東京大学に留学して博士号を取得した。日本の大学で長年教壇に立ち、研究と教学の傍ら、台湾独立運動にも携わった。巻末の解説で指摘されたように、本書は台湾人研究者による台湾近代史、日本統治下台湾史に関する戦後初めての概説書である。黄は日本の台湾統治史を記述する自身の立ち位置をはっきりと自覚している。それは、「13歳まで日本帝国の植民地人としてすごした」者としてである。

植民地政治史の名著として、本書は平易でかつ読みやすい1冊である。内容は初期武官総督時代、文官総督時代、後期

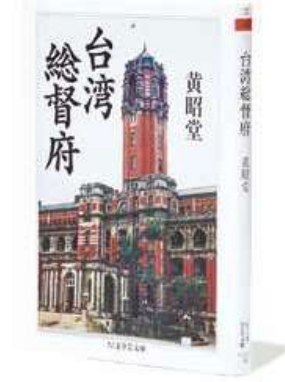
武官総督時代に分けられ、それぞれの時期の特徴および統治に向き合う台湾社会の対応、抵抗まで論じたその行間からは、台湾の歴史への深い愛情を感じとれる。前著の『台湾民主国の研究』（東京大学出版会、1970年）との連続性も見いだせる。日本統治の幕開けは、台湾民主国に象徴される台湾民衆の抵抗を血生臭い暴力によって制圧したことである。しかしこの事実、1世紀以上を経た今日、ほとんど忘却されている。著者の日本統治時代への評価も興味深い。台湾人が日本統治時代に抱くよき思い出は、教師への敬愛の念によるものが多く、決して日本による植民統治全体を肯定するものではないと釘を刺している。

本書の読者は今後、台湾の総統府を見学する際、建築物の美しさを賛嘆すると同時に、かつての植民権力の下に生きた台湾人の運命に想いを馳せることになるだろう。

『台湾総督府』

黄 昭堂

ちくま学芸文庫 2019年 ¥1,320
ISBN : 9784480099327



『誰の日本時代』

ジェンダー・階層・帝国の台湾史

洪 郁如

法政大学出版局 2021年 ¥3,080
ISBN : 9784588603624



著者は台湾における自らの幼少時の経験を省みながら、外祖父は、太平洋戦争末期に鉄を隠したために捕まり鼻から水を注入されたと記し、次のように述べる。「考えてみれば、警察官として新竹に駐在した義祖父と、日本人警察からの暴力を受けた外祖父は、あの時代にはそれぞれ支配側と被支配側に分かれていた」。この「からまりあう」歴史を、本書では「家族史」として表現している。その場合の「家族」とは情緒的な一体感によって社会的な対立を観念的に無化する場所ではない。むしろ「家族」の中にすら何重もの亀裂が存在していることへの気づきを示されている。この亀裂を乗り越えるために、日本社会の側でも「親日台湾」というナルシシスティックな歴史認識を克服していく必要がさりげなく、しかし、説得力のある筆致で示されている。

カバー表に用いられた著者の父母の結婚写真、「牡蠣採取のために海に入る牛車」の写真、1960年代の海辺の村における従姉妹の写真、カバー裏のサトウキビ畑の写真、どれも侯孝賢監督の初期の映画作品のように美しく、想像力を刺激してやまない。

京都大学の駒込武教授がFacebookに本書の魅力を紹介してくださっているの で、本人の許可をえて、以下に一部を抜粋する。

「誰の日本時代」という表題の意味は、すぐにものみ込みにくい。だが、本書をひと通り読み終えたあとではナルホドと思えてくる。「誰の」はさしあたり「台湾人の」ということになるのだろうか、その場合の「台湾人」とははたして「誰」なのか。「はしがき」で記すように、かつての植民地だった台湾にかかわる記憶は、戦後日本において蒋介石や中国国民党のイメージにより「上書き」された。1990年代以降、李登輝が日本語により発信したことを通じて台湾の存在が再発見される中で、「親日台湾」というイメージもつくられた。だが、その場合の「台湾人」とは誰なのか。「日本時代」に学校教育の周縁や外側に排除された多数者はそこに含まれているのか？ ジェンダー・ギャップ、農山漁村と都市部、エリート層と労働者層の違いに細心の注意を向けながら、さらに「日本時代」と「戦後史」をつなぎながら、彼女ら／彼らの経験を紡ぎ直す作業が展開されている。



『台湾総督府文書の史料論』

中京大学社会科学研究所台湾史研究センター・編

創泉堂出版 2018年 ¥5,940
ISBN : 9784902416404

1982年から中京大学社会科学研究所台湾史研究センターは、中華民国政府に継承された台湾総督府文書の整理、編纂作業に関与し、台湾総督府文書に関する研究を蓄積してきた。『台湾史研究シリーズ1』として発行された本書では、史料としての台湾総督府文書の性格や内容を論究するとともに、公文書としての総督府文書の性格や背景、そして官僚機構、公共事業、教育に着目した論文を収録。



『台湾総督府の統治政策』

中京大学社会科学研究所台湾史研究センター・編

創泉堂出版 2018年 ¥5,500
ISBN : 9784902416411

中京大学社会科学研究所台湾史研究センターが蓄積してきた、台湾総督府文書の整理、編纂作業と、関連する台湾総督府文書関係研究の成果を発表する「台湾史研究シリーズ2」。台湾総督府および台湾総督の性格や権能、組織に着目し、日本の台湾統治における総督府の政治的、法律的立場や制約を明らかにするとともに、台湾総督府の衛生や医療制度、教育に着目した論文を収録。



『帝国幻想と台湾 1871-1949』

和田博文、呉 佩珍、宮内淳子、横路啓子、和田桂子

花鳥社 2021年 ¥7,480
ISBN : 9784909832498

新聞・雑誌・書籍・ラジオ・映画・美術・食文化・ファッション——。いま鮮明になる日本統治下の台湾。日本と台湾、双方の膨大な活字媒体を収集し、徹底実証する。文学研究、歴史学、政治学や経済学など、学問ジャンルを跨いで、近代日本人の異文化体験の実相を問う。詳細な「関連年表」を附載。当時の写真多数掲載。



『帝国日本のアジア認識』

統治下台湾における調査と人材育成

横井香織

岩田書院 2018年 ¥3,080
ISBN : 9784866020566

近代日本最初の植民地である台湾において、台湾総督府を中心に組織的に行なわれたアジア調査及び、南進のための人材育成事業の実態や特質を解明、その意義を考察する。近代日本の植民地支配の様相を、調査と教育という視点から描き直す。



『二つの時代を生きた台湾』

言語・文化の相克と日本の残照

林 初梅、所澤 潤、石井清輝・編著

三元社 2021年 ¥4,180
ISBN : 9784883035410

日本とは異なる「戦後」を歩んだ台湾。日本統治時代に生まれ育った台湾人は、戦後になって日本人が去ったあと、どのような社会を、どのように生きたのだろうか。ふたつの時代を生きた台湾人の経験に迫る。台湾人にとっての「日本」とは。



『20世紀前半の台湾』

植民地政策の動態と知識青年のまなざし

塩山正純・編

あるむ 2019年 ¥3,300
ISBN : 9784863331501

20世紀前半における約50年間の台湾を、歴史学、文学、政治学など多角的なアプローチから見つめなおす。また、近代知識青年を代表する東亜同文書院生の台湾に関する記録から、彼らの見た植民地、台湾像、食などについて、戦前の50年間の傾向、特徴、変化を明らかにし、彼らが抱いたアジア観を掘り起こす。



『離散と回帰』

「満洲国」の台湾人の記録

許 雪姬／羽田朝子、殷 晴、杉本史子・訳

東方書店 2021年 ¥8,800
ISBN : 9784497221094

日本における「満洲国」の研究蓄積は、ほとんどが日本人についてである。戦前、日本領だった台湾からも、「王道楽土」を目指して「満洲国」へ渡った人々がいた。台湾人でありながら「日本人」でもあった彼らがなぜ「満洲国」へ渡ったのか、現地でどのような生活を送ったのか、そして日本の敗戦をどのようにして迎えたのか。オーラルヒストリーの手法で満洲経験者の話を集め、さまざまな資料を収集し、彼らの実態を描き出す。



『台湾抗日運動史研究』

増補版

若林正文

研文出版 2010年 ¥7,700
ISBN : 9784876361977

日本統治期における台湾政治社会運動の先駆的研究である。台湾住民の種々な抵抗運動を日本帝国主義による植民地支配の実態を照らし出すものとして、中国大陸との内的関連を踏まえつつ分析。1983年出版の『台湾抗日運動史研究』に、主として同書出版とほぼ同時かその後に発表された台湾近代史関連の論考4篇を「付篇」として加えた増補版。



『かれらの日本語』

台湾「残留」日本語論

安田敏朗

人文書院 2011年 ¥3,080
ISBN : 9784409041024

日本植民地時代の「国語」教育、およびその「成果」をめぐる、当時から現在までのさまざまな言説を分析。台湾人の奇立ちと諦観、教育者のあせりと自己満足、旅行者のノスタルジー、言語学者の興奮など、日本語を話す台湾人という現象からあぶり出されるのは、むしろ日本人の日本語観である。



『帝国日本の「開発」と植民地台湾』

台湾の嘉南大圳と日月潭発電所

清水美里

有志会 2015年 ¥7,260
ISBN : 9784903426976

これまで、功罪ばかりが論じられてきた植民地におけるインフラ開発の実態を詳細に調査・分析。台湾の重要な開発事業だった南部の嘉南大圳という広大な水利設備と日月潭発電所の事例に即して「植民地的開発とは何か」を論じていく。帝国と植民地の二項対立の中で不可視化されてきた、現地社会とそこに生きた人々の姿に迫り、帝国と植民地を貫く権力構造や官／民に對置されえない台湾人・在日日本人の関係を立体的に浮かび上がらせる。



『日本統治時代台湾の築港・人材育成事業』

井上敏孝

晃洋書房 2021年 ¥4,950
ISBN : 9784771034471

日本統治時代の台湾で進められた築港事業の詳細とその歴史的意義を明らかにする。台湾総督府の築港方針、築港事業に携わった技術者の人材育成。このふたつを柱として分析し、台湾の築港事業の「経緯」が台湾総督府及び日本帝国のその後の政策にどのように影響したかを解明しようと試みる。台湾における築港「経緯」を明らかにした1冊。



『帝国日本の気象観測ネットワークVI』

台湾総督府

山本晴彦

農林統計出版 2018年 ¥5,500
ISBN : 9784897323992

明治から大正・昭和へ、激動の中の台湾気象観測史。明治29(1896)年に台北測候所が創設され、その後昭和20(1945)年の終戦まで、拡充されながら台湾島を中心とした気象観測が展開された。戦前から戦中にわたるその観測業務の展開を、職員の変遷と膨大な気象資料によって浮き彫りにする。



『帝国をつなぐ(声)』 日本植民地時代の 台湾ラジオ

井川充雄

ミネルヴァ書房 2022年 ¥7,700
ISBN : 9784623092796

1925年に始まった日本のラジオ放送は、1928年11月の御大礼を中継するべく、「外地」や満洲国も含めた放送網の整備を進めた。日中戦争が始まると、「東亜放送網」を形成し、日本の版図全域に拡大。ラジオは国語やラジオ体操の普及など、国民化＝皇民化のための文化的統合の手段として用いられ、また台湾放送協会は南方への宣伝の拠点ともなった。台湾を舞台に、帝国をつなぐ(声)として機能した初期ラジオの実相を明らかにする。



『音楽と戦争の Rond』 台湾・日本・中国のはざま で奮闘した音楽家・江文 也の生涯

劉 美蓮／西村正男v訳／廣瀬
光沙・訳集広舎 2022年 ¥3,850
ISBN : 9784867350270

台湾生まれの少年は「皇民」となった。ベルリンで開催された音楽のオリンピックに「日本人」として参加した江文也。その後、北京に根を下るすも、日本敗戦の翌年、漢奸(売国奴)罪で投獄。文化大革命では手帖とピアノ、楽譜の多くを没収される。音楽に生き、戦争に翻弄された音楽家の生涯をつぶさにたどる。



『水明り』 故八田與一追憶録 復刻版

八田技師夫妻を慕い台湾と友
好の会・監修北國新聞社 2020年 ¥1,650
ISBN : 9784833022255

烏山頭ダム着工100周年記念出版。外代樹夫人が刊行した八田與一技師の追憶集。1920年から10年の歳月をかけて、台湾南部の烏山頭ダムを中心とした大規模灌漑施設を建設した八田與一技師。技師が書き残した手紙20通のほか、親族による追想文や関係者の座談会などを収録する。主要資料に中国語訳を掲載。



『台湾引き揚げ一家 の記録』

命の恩人と“再会”した
70年ぶりの里帰り

河内洋輔

PHPエディターズ・グループ
2021年 ¥1,430
ISBN : 9784909417909

台湾で生まれ、戦争が終わった翌年、命からがら引き揚げ船で日本に帰国した著者が、母の手記を中心に、母の人生や当時の状況を記す。戦後70年が経ってようやく果たされた台湾への旅、命の恩人との再会についても綴る。



『郵便が語る 台湾 の日本時代50年史』

玉木淳一

日本郵趣出版 2021年 ¥2,420
ISBN : 9784889638523

日清戦争で日本に割譲されてから太平洋戦争が終わるまで、台湾と日本の50年間の歴史を、手紙や葉書という貴重な郵便物をとおり、政治、交通、教育、産業、軍隊など、さまざまな角度から多くのビジュアルをまじえ、総合的かつ立体的に読み解く。2020年11月に開催された全国切手展「JAPEX 2020」での台湾切手展の展示物を中心に構成。



『台湾博覧会1935 スタンプコレクション』

陳 柔緬／中村加代子・訳

東京堂出版 2020年 ¥3,960
ISBN : 9784490210422

日本の台湾統治40周年を記念して開催された「台湾博覧会」。台湾各地の民間商店から集めた191の店舗・パビリオン・施設スタンプ約300点のコレクションを紹介。時代の空気が鮮やかによみがえり、当時の一般庶民の暮らしを垣間見ることができる1冊。



『石坂莊作と顔欽賢』 台湾人も日本人も平等に

手島 仁

上毛新聞社 2020年 ¥1,650
ISBN : 9784863522602

日本統治下の台湾で、日本人も台湾人も無料で学べる基隆夜学校を創設した石坂莊作。群馬で学び、基隆夜学校を前身とする学校を引き継いだ台湾人・顔欽賢。彼らの歩みを取り上げ、群馬県と台湾、日本と台湾との関係を考察する。台湾に尽きた上州人と、群馬で学んだ台湾人の物語。



『星乃湯 龍の夢』

台湾北投に“日本”を
つくった佐野庄太郎一家

剛 衛

集広舎 2021年 ¥1,540
ISBN : 9784867350140

台北市郊外の北投に純和風の温泉旅館「星乃湯」を築き、地元の発展に大きな功績を残した佐野庄太郎。明治から昭和にかけて、日本統治時代の台湾で夢を叶えるために奮闘した男とその家族の物語を、事実にもとづいて描く。



『躍動する青春』 日本統治下台湾の 学生生活

鄭 麗玲／河本尚枝・訳

創元社 2017年 ¥3,960
ISBN : 9784422202723

日本統治下だった1930～40年代、台湾人学生らはどのような青春を過ごしたのだろうか。本書は、調査資料やインタビューをもとに、170点以上の貴重な写真で当時の学生たちの豊かな日常を描き出す。入学試験、試験のための参考書、問題集、寮生活からクラブ活動、読書、娯楽、スポーツ、レジャー、修学旅行など、18のテーマで学生生活をいきいきと紹介する。



『僕たちが零戦を つくった』 台湾少年工の手記

劉 嘉雨

潮書房光人新社 2018年 ¥1,980
ISBN : 9784769816638

1943年、新設される高座海軍工廠の工員確保のため、海軍は台湾から優秀な少年たちを動員した。働きながら上級学校の卒業資格と給料がもらえるという好条件で、小・中学校卒業予定者の中から志願者を募集。厳しい選抜試験を突破し、航空技師・技手を夢見て台湾から米潜水艦の潜む海を越え日本にやってきた8,400人余の少年たち。慣れない寒さと食糧不足、激しい空襲に耐え、助け合い競い合いながら懸命に生きた元少年工の証言。



『春の夢』 或る台湾人女性の物語

許 旭蓮／山中啓二・訳

神奈川新聞社 2021年 ¥1,870
ISBN : 9784876456192

戦争という巨大な暴力の奔流に巻き込まれて成就できなかった初恋。自分の運命に立ち向かい、時代の変化に合わせて生きる中で起こる思いがけない出来事——。横浜と台湾を舞台に描く、日本統治下に生きた台湾人女性の物語。



『街道をゆく40 台湾紀行』 新装版

司馬遼太郎

朝日文庫 2009年 ¥1,078
ISBN : 9784022644947

「国家とは何か」をテーマに、1993～94年に訪れた台湾を描いた長編。蔣家の支配が終了し、急速に民主化がすすみ、歴史が見直されようとしていた台湾。著者は台北、高雄、台東、花蓮などを訪ねる。そこには、「台湾」という故郷を失った日本人もいれば、「日本」という故郷を失った台湾人たちもいた。巻末に当時の李登輝總統との歴史的な対談「場所の悲哀」を収録。